（平成６年１月12日発行）

会報

第１号

北海道高等学校世界史研究会
事務局　北海道札幌平岸高等学校
062 札幌市豊平区平岸５条18丁目
TEL　011-812-2010
FAX　011-812-2049

ごあいさつ

北海道高等学校世界史研究会

会長　丹　　暢夫

（北海道旭川東高等学校長）

平成５年８月５日，第24回北海道高等学校世界史研究会総会において，会長として選出されましたので，一言ご挨拶申し上げます。

昭和45年第１回の研究会開催以来，初代会長磯貝芳司先生から，福島義治先生，丸山恵照先生と受け継がれ，前会長菊地守典先生には，昭和61年から温かいご指導をいただきました。心からお礼を申し上げる次第です。

歴代会長は，人格・識見ともに卓越され，高名で知られた方々ばかりであり，比べて浅学非才の身としては，その任に不適切かと思っております。もとより微力ですが，副会長の小山内先生・久富先生や役員・事務局の先生方のご協力をいただきながら努力する所存ですので，よろしくご支援をお願いします。

この研究会は，札幌開成高校を事務局として創設され，当初から組織拡大を望まず，史学研究の先端で活躍する大学の先生の講演と個人研究や教育実践の発表とを二つの柱とし，一貫して地味なしかし着実な歩みを進めてきました。

研究主題は，“国際理解を深めるための世界史教育”を掲げ，平成２年（1990）には，『歴史地図によるトレーニングワーク世界史』という画期的な副教材を刊行し，全国的にも高い評価を得ています。今回の世界史必修化に対応しながら，さらに国際社会に生きて行く生徒たちの未来のために，授業実践に役立つ研究会の充実を目指したいと考えますので，積極的な参加とご意見・ご要望を寄せて下さいますようよろしくお願い申し上げます。

第２４回研究大会記録

日　時　　平成５年８月５日（木）
会　場　　札幌市教育文化会館
主　題　　国際理解を進めるための世界史教育はいかにあるべきか
講　演　　東出　　功　氏　（北海道大学文学部教授＝教養部勤務）
研究発表　吉嶺　茂樹　氏　（北海道札幌西高等学校教諭）
　　中川　雅史　氏　（北海道松前高等学校教諭）
司　会　　川音　　強　氏　（北海道札幌稲雲高等学校教諭）
　　赤間　幸人　氏　（北海道札幌東高等学校教諭）
記　録　　吉田　　徹　氏　（北海道根室高等学校教諭）

講　演

東出　　功「教会の視点から中世国家を考える ── イギリス ──」

《はじめに》

私は，山川出版社の依頼で『歴史と地理』第429号（1991年）の「余滴」に「中世イギリスの官僚たち」という短信を書き，昨年『歴史と地理』第447号（1992年）に「国王統治と官僚聖職者 ── 中世イギリス」を発表した。今日は，後者に肉付けをする形で報告をさせていただく。

私は，ヨーロッパの歴史のなかで，国家と教会の関係において，教会が相対的に軽視されているように感じていた。一橋大学の山田欣吾教授の論文「教会としてのフランク王国」の大胆な表題を見て「なるほどそうか」という気持ちになった。私自身も，聖職者が国王の行政から一斉に手を引いたらイギリス王国は崩壊しただろうと考えていたので，山田先生に共感するものがある。

１　「国家官僚」の実態 ── 官僚聖職者

Handbook of British Chronology という「年表」があり，その目次にイギリスの国家官僚の一覧表が載っており，イングランドだけでも33項目ある。この33項目のうち，大半は近代以降の官職で，その中の６項目が中世の官僚に当たる。これを国家官僚と見なすかどうかという点で「国家とは何か」という疑問も生じるが，少なくとも国王官僚とはいえる。このうち検討の対象となるのは４つの長官職で，それは主に文書関係と財政関係に大別される。大法官府長

官は，王国で最高の官職で国印を管掌する（当時ヨーロッパでも印が使用され，書類の下に穴を開けて紐を通し封蠟をペンダントのようにぶら下げていた）。王印庁長官は秘書官長といった役割で，国王の私印（王印）を管掌した。国印文書・王印文書は各種特権の認可や官僚の任免，訴訟の指示など行政・司法のあらゆる面に及んでいた。一方，財政関係も王国の財政を扱う財務府長官と王室の財政を管理する納戸庁長官とに分かれていたが，役割分担は場当り的であった。

ここで問題なのは，歴代の長官職における聖職者と俗人の比率である。聖職者優位から俗人優位への変化を「俗人化」と呼んでおこう。「俗人化」は文書関係省庁・財政関係省庁とで遅速の差異があるとはいえ，少なくとも14世紀末までは主要省庁で聖職者優位が続いた。従って聖職者が主要省庁から一斉に撤退すれば，国王行政は瞬時に崩壊したであろう。

主要官庁の主要な官職は，“king's clerks”に委ねられた。“クラーク”の原義は聖職者であり，読み書きの能力や法律知識はほぼ聖職者によって独占されていた。“クラーク”は官僚・書記とも訳されるが，中世の“クラーク”は実態において聖職者であった。

2　国王官僚の給養財源 ── 「聖職禄」

上記のハンドブックには，聖職者・俗人の区別だけでなく職階や身分についても記載されている。大法官や財務府長官では，現職の大司教や司教といった最高位の聖職者が長官職に任命されている。それに対して王印庁長官や納戸庁長官は，司教候補級かそれ以下の階層から登用されている。しかし，俗人（貴族）に関しては，大半が下級貴族からの登用である。

官僚における聖職者優位（聖職者依存）は，どのような事情によるのか。聖職者の読み書き能力や法律知識のほかに，官僚を雇用し給養するための財源の事情がある。近代前期の絶対王政は，有給官僚群と常備傭兵軍隊をその権力基盤とした。軍隊は，貴族の私兵集団への依存から国王直属の軍隊を，官僚については，教会からの制約がない王権直属の俗人官僚群を整備しなくてはならない。これらの権力基盤を構築・維持するためには，王権独自の財源が必要である。中世における官僚の聖職者依存は，王権にそれ相応の財源がなかったことをも意味する。聖職者依存は教会依存にほかならない。官僚聖職者は，聖職者として教会の財源で給養される。教会が聖職者にしかるべき聖職禄（俗人における知行）を保障し，その次に国王が彼に官僚の職務を委託する。彼は官職から報酬を受け取ることもあるが，国王は，少額あるいはただ同然で最高位の聖職者から最高官僚としての奉仕が期待できた。

中世イギリスにおける教会組織は非常に複雑である。イギリス・ウェイルズには２つの大司教管区，21の司教管区，60の司教補佐管区があり，さらにその下には，実数は不明ながら，地方主任司祭管区，聖堂区などがある。各職階の

聖職者は何らかの聖職禄を占有しており，またそれぞれの職務に応じた固有の聖職禄を占有している。聖職禄は聖職者としての勤務，すなわち神への奉仕の報酬である。

俗界における封建家臣は封建主君への奉仕，とりわけ軍役奉仕の反対給付として知行を与えられた。聖職禄と知行とは反対給付という点で共通している。しかし，聖職禄は神への奉仕ではなく，国王への奉仕の反対給付にもなりえた。何故か。この目的外利用に関連して「パトロン権」という慣行が問題になる。

3　神への奉仕／国王への奉仕 ── パトロン権

パトロン権(patronage)とは，教会における各種の役職や聖職禄へ候補者を指名する権利のことをいう。パトロン権は国王によって，俗界貴族によって，また地方の名望家によっても行使され，大司教や司教などもパトロンになりえた。パトロン権者は聖界と俗界との双方において，多数でしかも多様であり，王国の外部からローマ教皇や枢機卿がそれを行使することもあった。教皇のパトロン権は provision（直任権）と呼ばれた。教皇の直任権は，現地の教会の意向を無視して司教等を決めてしまう，いわば天下り人事である。要点を反復すると，以下のようになる。

①あらゆる聖職，従ってあらゆる聖職禄の１件１件にパトロン権者がおり，事実上の人事権を掌握していた。パトロンのいない聖職禄はない。

②王国内では国王が最大のパトロン権者であり，国外からは教皇が直任権を行使しえた。

③教皇の直任権も国王などしかるべき有力者からの仲介請願に配慮して行使された。

聖職者が聖職禄の取得や件数増加を望む場合は，しかるべきパトロン権者から指名推薦を受けなければならない。国内最大のパトロン権者は国王であるから，国王への忠実な勤務は，聖職禄の加増につながる。国王は独自の財源が不足しているにもかかわらず，聖職禄に対する人事権を行使することによって，多くの聖職者から忠実な奉仕を受けた。聖職禄の目的外利用の背景には，こうした国王のパトロン権がある。教会の中で出世しようと思えば，最大のパトロン権者である国王への忠誠に励むということになる。

《おわりに》

king's clerk という呼称は「国王直属聖職者」を意味するが，これは俗界の封臣に相当する聖職者である。国王のパトロン権の受益者は，聖職者一般ではなく，国王直属身分の聖職者であった。国王は俗界の封臣に対して自身が知行を調達したが，聖職者「封臣」に対しては国王自身ではなく，教会が知行を調達し，給養を代行している。中世イギリス王国は，国王官僚の給養については圧倒的な比重で教会の後見に依存していた。このような状況を「教会として

の王国」と呼ぶのは必ずしも誇張でない。

教会は他面において世俗権力の後見に依存した。教会は原理的に暴力の行使権をもたない。従って教会の財産や教会人の生命を外敵の暴力から守るには，しかるべき世俗権力の暴力装置に依存しなくてはならない。国王は，教会にとって最強の後見人であった。

山田教授によれば，ビザンツ帝国は行政実務において教会に依存する必要がなかった。従ってそこでは，近代化に当たって「俗人化」が問題になりえない。それに対して西ヨーロッパの近代化は，まさに「俗人化」の過程を含まざるをえなかった。

近代初頭の宗教改革は「教会の後見から国家が自立する過程での混乱」といえる。ジョン王はローマ教皇に屈服してその封建家臣になった。しかし彼は名を捨てて実を取ったともいえる。その後のイギリス王権は，逆に教皇の家臣という地位を利用して教会人事に大幅に介入している。

「教会の視点から中世国家を考える」ということは，国家・教会の比重に関して国家の過大評価に疑問を提起することにほかならない。では逆に教会の圧倒的優位を主張しようということか。国家優位か教会優位かは，歴史の局面に応じて変動する。中世において教会が常にしかも圧倒的に優位にあったといえば，それもまた事実に反する。過大評価は，国家・教会のいずれについても適切でない。私のこれまで一連の作業は，教会の過小評価を適正評価の水準にまで回復するためのものであった。その課題は，今後においても基本的に変わることがない。

研究発表 I

吉嶺　茂樹「世界史板書ノートの試みについて」

平成6年度から世界史が必修化されるが，必修化によって世界史が好きな生徒が増えるわけではないので，「大変だ」という思いが強い。今後，世界史を学びたくない生徒を相手にどのように必修の授業をやっていくか，我々の実践力が問われるのではないか。現代社会の必修化の時よりも大変だと考える。

1　「世界史板書ノート」について

前任校（紋別北高）で専門外の日本史を受け持った時に，何か生徒の興味を引きつけ，教科書を最後まで終わらせて，受験指導にまでつなげられる効果的な授業はできないかと思い，「日本史板書ノート」を作成した。「世界史板書

ノート」はこれを応用したものである。前任校では４単位，100時間の授業をどのようにやっていくか，そして教科書を最後まで終わらせるということを中心に考えた。莫大な世界史の中身を，授業でどのように整理して生徒に伝えるか，そのために視聴覚教材や実物教材をどう位置づけていくのかの一つの「叩き台」としてこの板書ノートを見ていただきたい。

世界史の教科書は日本史と比べて史料の数が極めて少ないので，これを補うという意味で，史料をワープロで打って提示するなど，板書ノートにはいくつかのメリットがある。このように冊子にして一番大きな成果は，自分が「世界史」とは何をやればいいのか見えるようになったことである。また，生徒に先の見通しを与えられる，その１時間に何の話をするのかがわかることなどがあげられる。テストや教科書の変更にも，柔軟に対応できる。

２　使用教材について

前任校では，世界史を受験に使う生徒はほとんどいなかったので，何をどう使って１年間４単位の授業をもたせるかに気をつけた。

世界史という科目の目的は，基本的に「違う文化をどのように理解するか」と考えており，「何を覚えたか」よりも，世界史を学んだことが生徒の興味・関心につながって，結果として歴史的事実から現実に対する何らかの判断材料を得るきっかけになればいいと考えている。

プリント特集では，世界史における「生活と文化」について扱っている。この領域で実際に授業で使えるものとして「社会史」の方法論があり，（これには批判もあるが）授業のアプローチとしては有効に利用できる。特にヨーロッパ史の領域では多彩な教材が考えられ，例えば童話からのアプローチであれば，「ハーメルンの笛吹き男」（阿部謹也氏の研究による）「ブレーメンの音楽隊」などは授業でも試みている。

またグリム童話などでも，例えば「カエルの王様」という話では，カエルが人間と契約関係を結ぶという部分は，ヨーロッパ人のものの考え方を表している。その他にも「ギリシャ神話」などを使用しているが，これからは絵画資料の活用に力を入れたいと考えており，ノルマンーコンクェストに出てくるバイユーータペスリーを拡大し全訳を読んでいる。

３　映画・音楽・実物教材について

(1) 映画教材

私は「薔薇の名前」という映画を使っている。中世ヨーロッパの文化は教えにくい部分だが，ショーン＝コネリー主演のこの映画は，社会史の研究家ジャック＝ルゴフが考証を担当しており，しっかりした内容である。またこれに関する研究文献が20冊以上出ているので，アプローチしやすい。

(2) 音楽教材

名寄高校の出口敬智先生，根室高校の吉田徹先生の実践を参考にしているが，音楽科の音楽史の教材のなかには利用価値の高いものがある。音楽とは別にイスラムのコーランの朗読テープなども使用している。これは綿引弘『手に取る世界史教材』にヒントを得て，宗教法人イスラミックセンター－ジャパンに問い合わせて入手した。コーランの対訳本や各種パンフレット，礼拝に使う絨毯なども送っていただいた。

(3) 実物教材

実物教材はなかなか入手困難だが，私の場合は学校の図書館にあった漢籍をコピーして生徒に配布したり，インドの香や仏足石拓本などを国立民族博物館で入手した。スパイスなどの食品は，札幌のデパートの地階でも結構手に入る。ＯＯ物産展や展覧会のパンフレットは厚紙に貼り，マルチコートフィルムでカード化して活用すると授業で便利である。

レプリカも，東京国立博物館の通信販売などで容易に入手できるようになった。また出版物としては，北京から直接送ってくる『中国画報』（日本では手に入らない遺物の写真や図あり）や『アッサラーム』（イスラムを紹介する雑誌）といった雑誌も利用している。

このようにいろいろな教材を使うために授業時間が不足する。板書ノートを活用するのはこのためもある。

4　おわりに

最後に今後の課題をいくつか挙げてまとめにしたい。まずティームティーチングやディベートをいかに授業に取り入れるかという問題がある。現在は主題学習などでも教師側からの説明が主だが，そのテーマについて生徒のレポートを報告会というような形式で生かせたらと思っている。

前任校にいた時もやっていたことだが，地域の博物館などとの連携もこれから図っていきたい。また，世界史の読書案内の作成にも取り組みたい。

最後に，「ネットワーク論」についてふれる。世界史Ａの導入に伴い，「ネットワーク論」「世界システム論」の立場から世界史を記述する教科書が増えてきている。この視点は，東京書籍が最もよく取り上げているが，東洋と西洋のつながりなど，切り口としては面白いが，はたして紀元２世紀にネットワークが成立していたかどうかは疑問である。しかしながら，８世紀のイスラムや13世紀のモンゴルの時代に，このころの中国はどうであったか，ヨーロッパはどうであったかというのは，生徒にわかりやすく「世界史を大きくとらえる観点」としては有効である。大学入試でも出題がしやすいと思われるので，今後ますます増えていくことが予想される。

今年（1993）７月に，大江一道氏の近現代史を世界システム論の観点から考えた『世界近現代全史』という本が出版されたが，こうしたものについては，授業でどう取り上げるかを勉強していかねばならないと思う。

もともと「ネットワーク論」や「世界システム論」は社会学や経済学の領域から歴史学に出てきた観点だが，これが歴史学，教科書，生徒への切り口としてどのように位置づけられるか，我々教師の側がどのように（授業の中で）教材化していくかが今後の課題として残されている。また近現代の充実ということではまだまだ落ちている部分があると思う。現在までの私の実践の中間総括として，諸先生のご批判をいただければ幸いと思っている。

研究発表 II

中川　雅史「旧ソ連について考える－松前高校社会科主題学習の実践－」

本校の主題学習は，ひとつのテーマについて社会科の教員全員で授業を分担して取り組むもので，札幌北陵高校の実践をヒントに昭和58年から開始し，10年間スタイルを変えながらも続いている。最初は現代社会において「青函トンネルを考える」というテーマを取り上げスタートしたが，昭和62年からは年３回，日本史や地理にも広げ，また平成３年からは授業の最後にシンポジウムを実施している。

(1) 主題学習の特徴について

本校における主題学習の特徴は次のとおりである。

①学年ごと，全クラスにわたって授業を展開している。

②視聴覚教材を積極的に利用している。

③時間割を工夫し，連続授業になるようにしている。

④他の教員や管内の小・中学校の教員も参観できる公開授業として実施している。

主題学習のテーマ設定に際しては，「地域を知る」ということと「世界的な視野」を意識している。「ソ連を考える」は平成３年８月のソ連のクーデタが起こった時点で，テーマを決定した。

この大テーマに沿って，地理・政治経済・日本史・世界史の各分野の小テーマを設定し，５人の社会科教員が担当している。毎回主題学習では，各教員が小テーマごと分担して独自のテキストを製作（Ｂ５版綴じ込み，約60ページ）しているが，これはかなり大変なもので，普段の教材研究の数倍にも相当するが，教員にとっては非常に勉強になる。

(2) 「ロシア革命とソ連邦の成立について」

私が担当した世界史的視野からの小テーマは「ロシア革命とソ連邦の成立」

で，ソ連の崩壊の原因をかつての歴史の中から探る目的で，ロシア革命からスターリンの時代を中心に扱った。授業の展開では，視聴覚教室を使用し，教材としてカセットテープ，ＶＴＲ，掛け地図，パネルなどを利用した。１時間の授業では内容のすべてを取り上げるのは難しく，ビデオも細切れに見せたり，時間がないため板書ができないので，ボードに書いたキーワードを確認のために使うなど内容の精選に努めた。

(3) 視聴覚教材の使用について

視聴覚教材については，単独ではなくいろいろなものを取り混ぜて使うように心がけた。ＯＨＰ，ＶＴＲ，音楽などでは，例えばＶＴＲもいくつかの番組を５～15分に編集したものを見せたり，またそれとともに人物の写真を拡大コピーしたパネルやビデオに出でてきたキーワードをフリップボードにして確認するなどの工夫をした。しかしながら，視聴覚教材に頼りすぎた感もあり，次回への反省である。

(4) シンポジウムについて

これは平成３年から始まり，今年で３年目になるが，連続授業のまとめの機会をつくるという意味で，パネルディスカッション方式で行っている。時間割の関係上，学年代表の１クラスで実施する。シンポジウムの展開は，

①各授業者による授業のまとめと問題提起（15分）
②生徒からの質疑・応答（15分）
③提起された問題点に対する生徒の意見（10分）
④シンポジウムのまとめ（５分）

という内容である。事前に生徒に質問用紙を配布し，それをもとに解説したが，うまく意見を引き出すことができなかった。シンポジウムを何とかうまくやれないか，これが今後の課題だと思う。ただ生徒はわからないなりに非常に関心を持っているということが確認できた。

(5) 提出レポートについて

現代社会（１年）と日本史（２年）における主題学習ではレポートの提出を課してきた。「～について自分の考えを述べよ」（800字×２枚程度）という形式で，テーマがそれぞれの分野から出され，その中から１つ選んで書くことになっている。生徒から提出されたレポートは，毎回製本して図書館に保存している。こちらは，予想以上にしっかりとした内容のものが多く，提出率も100%である。

問題点としては評価がある。過去10年間は，内容では評価せず，提出の有無だけで評価するという姿勢できた。問題にどれだけ迫ったかが大切だという観点に立っている。ただし今後は，各レポートにコメントを付けて返却すること

も必要ではないかと思う。

(6) 反省と課題

反省と今後の課題だが，反省としては，以下のものがあげられる。

①ソ連（平成３年は「中東を考える」，平成５年は「ＰＫＯについて考える」）など難しい問題を短時間で生徒に教えることは可能か。

②毎回テキストが膨大な量になって消化不良であるので精選が必要。

③視聴覚教材に頼りすぎである。

④シンポジウムの方法の工夫。

今後の課題だが，まず生徒の視野を身近なものから世界へと広げていくようにテーマを設定したいと思っている。１年で行う主題学習を，２・３年の社会科の中で何とかつなげて活用できないか，また生徒に一方的に授業するのではなく，作業を取り入れるなど生徒を動かす工夫も考えたいと思う。あとは授業形態の工夫（２クラス合同，班単位）や他教科との合同（理・英）により，他面的に問題に迫ってみたい。加えてテーマの関連性をよく考えた時間割の工夫なども検討材料である。

(7) まとめ

本校の生徒は，学習意欲や学力の点でもそれほど高いレヴェルではないが，主題学習はそういった生徒の実態に合わせるというより，高校生として，その時々で意識を持たなければならないことをテーマとして取り上げている。

次にはたしてこの主題学習の成果は上がっているかどうかということだが，

①社会科＝暗記ものという固定観念の打破に役立っている。

②生徒の関心や理解しようとする意識は高く，それに応える意味で教師の側の勉強にもなっている。

③生徒一人ひとりの意見形成のきっかけになっている。

と思う。10年間の実践は，これまでの社会科の諸先生が途切れることなく継続したもので，これらの先生方の苦労のおかげといえる。今後もこの実践を，少しでも長く良い方向に向けてやっていきたい。

新刊紹介

最近のヨーロッパ中・近世史に関する文庫本から

近年，出版界においても文庫本の位置づけが変わってきたように思われる。一般書で残せない本，長く絶版になっていた本が文庫化され，我々の手に入りやすくなったことは好ましいことであろう。このコーナーでは，最近出版されたこうした文庫本のなかで，世界史の教材として利用しやすいものを２，３取り上げてみたい。

まず，『エリュトラー海案内記』（中公文庫・村川堅太郎訳注）があげられよう。この書物は世界史の教科書にも記載され，大学入試などでも再三出題されながら，単独の著作としては1946年の出版以来47年間にわたって再版されていなかった（増田義郎氏の解説による）。今回文庫化されることになったことは，大変喜ばしいことである。訳者村川氏の解説・訳注はこの文庫の半分以上をしめる詳細なものであり，訳者のギリシア史についての豊富な研究をふまえた，分かりやすく丁寧なものである。巻末の地名比定図も大変興味深いもので，教科書に記載されている東西交易の実態図を，原典の『案内記』にあたって確かめることができるようになった。東西交渉の歴史については，近年研究の進展とともに，教科書の記載が増えている部分のひとつである。古典の文庫としては，古くから岩波文庫があるが，地方では手に入れにくい実態がある。今後もこうした書物の再版を望みたい。

今一点は，良知力『向こう岸からの世界史』（ちくま学芸文庫）である。近年の東欧情勢は，国家と民族との相剋をはらみ，我々世界史の教師にとっても目が離せない。それと同時に，現実が我々の学習を越えて進みつつあり，授業でどう取り上げたらよいか難しい部分であると思う。しかしながら，こうした「国家と民族との相剋」は，実は前世紀の半ば，ヨーロッパを吹き抜けた，1848年革命においても重要な問題であった。1848年革命の思想史について，研究の先頭に立ってきた著者は，「･･･ 世界史と民族の問題，とりわけ大国主義的歴史観と弱小民族の問題を考え，また1848年におけるウィーンとベルリンの状況を描くなかでこの革命－いわゆるブルジョワ民主主義革命－におけるプロレタリアートの存在理由と存在形態を求めてみた ･･･」とのべておられる。またこの書物では，48年革命に加わった「弱小民族」たる庶民の姿を描くため，多くのビラ・新聞記事等が利用されている。19世紀の庶民生活を教材化し，さらには東欧の民族問題を歴史を遡って考えさせるための格好の素材であろう。阿部勤也氏の解説も，同じ職場に勤め，病に倒れたかつての同僚である良知氏を描いた興味深い読みものとなっている。

ちくま学術文庫には，この他に，樺山紘一『歴史のなかのからだ』や前田愛『都市空間の中の文学』，鶴見良行『ナマコの眼』といった，「教材化できる」文献が多数収められている。来年はどのような文献が「文庫化」されるのか，期待したい。

最近のモンゴル帝国史研究をめぐって

ここ数年，モンゴル帝国史を扱った概説書が続いて出版された。それらのなかでは，杉山正明『大モンゴルの世界－陸と海の巨大帝国－』角川書店，1992年，をあげなければならない。この本の著者の杉山正明氏は，1970年代後半から，モンゴル帝国史像の再検討を精力的におこなってきており，本書はその集大成といえる。

本書の特徴は，モンゴル帝国についてのこれまでにはない新しい歴史像である。例えば，元朝と４ハン国については教科書でも扱われているが，カイドゥの反乱によって成立したのは，カイドゥの率いるオゴタイ家，チャガタイ家，アリク・ブケ家のゆるやかな連合である「カイドゥ王国」であり，オゴタイ－ハン国，チャガタイ－ハン国という政治的まとまりは存在しなかったとする指摘など，通説の見直しを大胆に迫る刺激的な見解に満ちている。また，南宋の滅亡により，ユーラシアを周回する海陸の交通体系，国際商業ルートがモンゴル帝国の手によって完成されたとする指摘などは，これまでにはなかった巨視的な理解であり，最近教科書でも取りあげられている「ネットワーク論」との関わりでも注目される。

なお，先年ＮＨＫで放送された特集番組「大モンゴル」は，本書の内容をほぼ忠実になぞったものである。ＮＨＫ取材班編『大モンゴル』Ⅰ～Ⅲ，角川書店，は，写真図版の仕上がりが良く，授業でも利用することができる。

次に，デイヴィド・モーガン『モンゴル帝国の歴史』角川書店，1993年，を取りあげたい。本書の訳者は，杉山正明氏と大島淳子氏である。本書の各所には，訳者（恐らくは杉山氏）の手による注がつけられているが，そのなかには，著者の見解に対する訳者の批評も含まれており，興味深い。本書の特徴は，モンゴル帝国についての欧米の研究を紹介していることと，ロシアとイランのモンゴルについての詳細な記述であり，参考になる点が多い。

（以上　文責編集部）

第25回研究大会案内

日時　平成６年８月９日（火）
会場　札幌市教育文化会館
講演　　未定
研究発表　未定（募集中）

24回の歴史を誇る世界史研究会ですが，会報を発行するのは初めてのことです。今後，会員の皆さまのご協力により，北海道の世界史教育の交流の場として，育てていければと思っております。よろしくお願いいたします。　（札幌稲西高　中村）